

この言葉、日本では、「男子、三日見ざれば、刮目してみるべし」と言い慣わしています。

・>・>・>・>・>・

三国時代、東呉の大將呂蒙は勇敢で戦上手、呉王孫権に重用されていました。呂蒙は家が貧しくて、学問をする機会に恵まれませんでした。孫権に勧められて勉強を始め、学識を積んでいきました。

ある時、軍師魯肅が呂蒙の駐屯地を訪れ、呂蒙が歓迎の宴を催しました。席上、呂蒙は彼の見解を披露しました。魯肅はそれを聞いて、非常に敬服し言いました：「以前、私は呂蒙將軍は戦が上手なだけの方だと思っておりました。学識、策略共に随分進歩されましたね。」と言いま

した。それを聞いた呂蒙は笑って言いました：「人間は、努力をして研鑽を積み進歩するものです、いつまでも昔の儘と思わないでください。」

・>・>・>・>・>・

**言葉の意味**：刮目＝目を見開く、見方を改める；看＝取り扱う、待遇する。意味は、昔の眼鏡で他人を量らず、新しい見方をしなくてはいけない、と言う意味。

**使い方**：彼は努力をして、前回「不合格」だったテストの成績を「優秀」にまで高めたので、クラスの皆は彼を見直した。

・>・>・>・>・>・

人間は進歩出来るのだから、レッテルを張ってはいけないということですね。しかしこれはかなり難しいことです。とかく人間は、過去の経歴で他人を判断しがちですから。

日本の社会では、今はだいぶ良くなっているとは言われますが、経歴上、何か躓きがあると、再起は非常に難しいと言われます。特に官僚と言わ

れる人々は、出世コースを歩めなくなると言われます。

随分前になりますが、新聞紙上を賑わせた事件がありました。詳しいことは忘れましたが、某県の警察本部に、警察庁から新しい本部長が着任しました。県警の交番勤務の巡査が家庭の事情に起

因する不祥事を起こし、管轄する警察署の署長、副署長がそれを隠蔽しようとして、更に大きな不祥事になってしまったことがありました。

署長や副署長の動機は、新任の本部長のキャリアに汚点を付けないように、ということでした。勿論そこには自分達の保身もあったことでしょうが、外部の人間にとっては、不思議に感

じ、理解できないことばかりです。

上に立つ人が部下の仕事にも責任を持つのは、形式としては当然と言えますが、この場合は、採用に関わってもいない、何千人もの巡査の中の一人の、しかも家庭に由来する不祥事で、本部長の経歴に傷がつくというのは解せません。

しかし現実には、このようなケースでも県警本部長の経歴上の不祥事となり以後の出世に差し障るのだそうです。一般的に言えば、部下に不祥事があった場合、其の事例を如何に処理するかで、その人の資質が評価されると思うのですが、実際は任期中に不祥事が起こったことがその人の経歴上の不祥事とみなされるのです。それで、保身のために何もしないリーダーが育つのでしょうか。

この点、日本はとても遅れていると思います。その人の経歴書を見るのではなく、その人が問題にぶつかった時の対処の仕方を見て、品格・資質が判断されるような文化が育って欲しいと思います。



挿絵 満柏氏